大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

漱石の『吾輩は猫である』とミケランジェロ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-12-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中江, 彬 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006200

漱石の『吾輩は猫である』とミケランジェロ

中江　彬

はじめに

夏目漱石（一八六七－一九一六）が『吾輩は猫である』（以下『猫』と略）を書きだしたのは、日露戦争の旅順松樹山攻撃が終った一九〇四年（明治三七年）一二月である。翌年一月に「ホトトギス」に一章が発表された『猫』は好評のために連載されて、ポーツマス条約締結後の一九〇六年八月に一一章で完結した。その間に『倫敦塔』など多くの作品も書いた漱石が[1]、『猫』でニーチェの超人思想のもとにおこなった辛辣な侵略戦争批判は、スターンのシャンディ精神で滑稽化されたので看過されている[2]。本稿では、ミケランジェロの巨人や預言者までさかのぼるその戦争批判の伝統を明らかにしてみたい。

一、髭と哲学

ブルジョア文明や歴史主義を批判すべく超人を説いた哲学者のフリードリッヒ・ニーチェ（一八四四年生）が、予言者的な髭の風貌を残して彼岸へと旅だった一九〇〇年八月二五日の翌月、三三歳の漱石は日本と友好的な英国へ向けて横浜から出港し、一〇月にはパリ万国博覧会に沸くパリにいた。その月にロダン展も開催されたこのパリには、今世紀を動かすことになるパブロ・ピカソ（一八八一年生）も初めて訪れていた。ニーチェの哲学をバルセロナで知っていた彼はパリでは深くそれに没頭する[3]。このとき日本で登張竹風は『帝国文学』に掲載した「独逸の輓代文学を論ず」でニーチェを紹介する。同年倫敦に向かった漱石は当地の倫敦塔で過去の亡霊に会ったり、自転車の乗ったりしつつ[4]、「気が狂った」と言われるまで文学について悩みぬきおそらくニーチェの哲学書まで読んで自己本位を悟っていた[5]。

一九〇二年一月にはニーチェに感化されていたリルケ（一八七五－一九二六）がミケランジェロ的な彫刻家オーギュスト・ロダン（一八四〇－一九一七）を訪れて、この彫刻家の本を書く[6]。またドイツの彫刻家マックス・クリンガー（一八五七－一九二〇－）は一九〇一年頃からニーチェの彫刻に着手して、一九〇三年には髭面のニーチェのブロンズ像（ライプツィヒ造形美術館）を制作している[7]。一九〇四年には、ニーチェの妹のエリザベートは『フリード

図1、ニーチェの写真

リヒ・ニーチェの生涯』をライプツィヒから出版し、その口絵写真には、横顔の考え込む髭のニーチェの写真（図1）を飾った[8]。エリザベートはスウェーデンの銀行家エルネスト・ティールを通じて自分の肖像画を《叫び》の芸術家ムンクに依頼するが、ティールはニーチェの肖像も注文した。

四二歳のエドアール・ムンク（一八六三－一九四四）は《フリードリヒ・ニーチェの肖像》（オスロ市立ムンク美術館）を描いたが（図2）[9]、その頬に手を当て考え込むニーチェの姿は漱石の記念写真（図3）に驚くほど似ていた。一九〇六年にムンクは、《フリードリヒ・ニーチェ肖像画》（図4、オスロ市立ムンク美術館）を超人の哲学者らしい二メートルの大きさで描いた。その頃ニーチェ的な破壊者を自覚したピカソはパリの洗濯船というアトリエで、友に「狂った」と言わしめた《アヴィニヨンの娘たち》（図5、ニューヨーク近代美術館）で過去の美術を壊しだしたとき、日本では漱石がピカソのグロテスクな絵に劣らぬ、ニーチェの肖像画廊にふさわしい疑似肖像画、つまり時代遅れの髭を蓄えた珍野苦沙弥のあばた面について書いていた。

図2、ムンク《フリードリヒ・ニーチェの肖像》

図3、漱石の記念写真

図4、ムンク
《フリードリヒ・ニーチェ肖像画》
部分

図5、ピカソ《アヴィニヨンの娘たち》

元来から行儀のよくない髯でみな思い思いの姿勢をとってはえている。いくら個人主義がはやる世の中だって、こう町々にわがままを尽くされては持ち主の迷惑はさこそと思いやられる、主人も……近ごろは大いに訓練を与えて、……わが髯の前途有望なりと見てとった主人は朝な夕な、手がすいておれば必ず髯に向かって鞭撻を加える。彼のアンビションはドイツ皇帝閣下のように、向上の念の盛んな髯をたくわえつつある。

『猫』の九章で突然、ニーチェ的に滑稽な髭と、ソクラテス的に醜いあばた面を苦沙弥が帯びる理由は、髭を調練する苦沙弥に届く巣鴨の狂人、天道公平からの神と糞に関する晦渋な手紙から判明する。

親友も汝を売るべし。……愛人も汝を棄つべし。富貴はもとより頼みがたるべし。爵禄は一朝にして失うべし。汝の頭中に秘蔵する学問には黴が生えるべし。汝何をたのまんとするか。天地のうちに何をたのまんとするか。神？　神は人間の苦しまぎれに捏造せる土偶のみ。人間のせつな糞の凝固せる臭骸のみ。……苦沙弥先生よろしくお茶でもあがれ。（傍線筆者、以下同様）

この箇所は、ニーチェの『ツァラトゥストラ』中の「ツァラトゥストラの言説」の言い換えである。世界の背面に神があると信じる「背面世界論者」の章で予言者ツァラトゥストラはこう語った。

わたしには世界は、苦しみと悩みにさいなまれている一個の神の製作物と思えた。世界は、そのとき一個の神の夢であり詩であると思えた。……兄弟たちよ、わたしのつくったこの神は、人間の製作物だ、人間の妄念……人間であったのだ。……人間とその「我」のあわれなひとかけらにすぎなかったのだ。わたし自身の灰と炭火の中からこの妖怪は、やって来た！。

天道公平はニーチェが言う「我のあわれなひとかけら」を「糞の凝固せる臭骸」に置きかえる。その手紙に苦沙弥が感心するのは、彼がクシャミ、クサメ、糞食め、クソッの口合せの糞食らえ先生だからである。ゾロアスターたるツァラトゥストラは火口の火で清め、イエスは水で清めるが、苦沙弥は『猫』の九章で、哲学者八木独仙がニーチェは自棄になり超人を生んだと言うように、七章のカーライルのトイフェルスドレック君［悪魔の糞教授］の自棄っ糞で清める。天道公平は美学者迷亭から見れば「金箔つきの狂人」であり、苦沙弥から見れば「瘋癲病質」である。苦沙弥は「自分もまた気違いに縁の近い者か」と自問するが、それでもこう言う。

気違いが団体となって勢力を出ると、健全な人間になってしまうかもしれない。大きな気違いが金力や威力を濫用して多くの小気違いを使役して乱暴を働いて、人から立派な男だと言われている例は少なくない。

ここで苦沙弥は『弁明』のソクラテスのような言い方で「人から立派な男と言われている」者を示唆する。それは誰なのだろうか。

二、戦争と文学と道徳

立派な男は日露戦争の指導者たる伊藤博文のようである。苦沙弥は時の権力者を気違いと示唆するが、自らも気違いだと言って、読者を煙りにまき、危険を清める。猫も「カイゼルに似た八字髯」の飼主が狂人と常人の差別さえできぬ「ぼんくら」であると保証する。なぜなら、天道公平の手紙の以下の内容に感心するからである。「人を人と思わざるものが、われをわれと思わざる世を憤るはいかん。権貴栄達の士は人を人と思わざるにおいて得たるがごとし。只他のわれをわれと思れぬ時において怫然として色を作す。任意に色を作りきたれ。馬鹿野郎」。馬鹿野郎は権貴栄達の士、革命を誘発する者である。「われの人を思うとき、他のわれをわれと思わぬ時、不平家は発作的に天降る。この発作的活動を名付けて革命という。革命は不平家の所為にあらず。権貴栄達の士が好んで産するところなり。朝鮮に人参多し先生何がゆえに服せざる。世を挙つて国家主義帝国主義に狂奔せる

は、吾国の現状なり」。要するに、天道によれば、日本は帝国主義に奔走して朝鮮人参たる韓国へ侵略している。そのような帝国主義への反抗者は個人主義者ニーチェだったという。そして天道は「ニーチェは極端なる個人主義の鼓吹家」だと主張してこう言う。

教育の実は挙らず、天才を呼ぶ声は徒に高くして、平凡なる教育没趣味なる社会は却て天才の流れを防遏して已むことなし。……一切の善悪説を排して、貴族的威権説を立し、人性の目的は、畢竟天才の要請にあるのみと説くものは、則ちニーチェに非ずや。

この天道の手紙は苦沙弥が無視する華族の手紙と密接に関連している。

日露の戦役は連戦連勝の勢いに乗じて平和克復を告げ吾忠勇義烈なる将士は今や過半万歳声裏に凱歌を奏し国民の歓喜何ものか……軍人遺族を慰籍せんがため……義捐あらんことを……

だが苦沙弥は「せんだって東北凶作の義捐金を二円とか三円とか出してから、会う人ごとに義捐をとられた」ので、もう金を払うのはごめんだとこの手紙を無視する。さらに裁縫最高等大学院をつくるために本書を買ってほしい、という別の手紙も無視する。ただ瘋癲病質、つまり憂鬱質の天道の手紙には感心したのである。これらの手紙は相互に関連している。それらを結びつけるのは「義捐金」という言葉である。義捐金は、不慮の災害に見舞われた人々に贈る金である。したがってそれは「平和克復を告げ吾忠勇義烈なる将士」の家族に贈る金ではない、そこには崇高感はない、と言いたげである。

漱石は『文学論』で道徳が介入しない崇高、滑稽、純美なるものがあると言う。その創造的なものにはミルトンの『失楽園』での天地創造の由来話、古代ギリシア彫刻、キーツの「ヒュペリオン」の詩がある。一方破壊的なものの崇高さの極みをこう述べる。

偖活動的崇高の一面なる破壊力とは、例へば三陸の海嘯、安政の地震若しくは天明の大火等人畜財帑を惜しげもなく掃蕩し去る惨劇を稱するものにして、是等を直接に経験するときは義捐金の醵集となり焚き出しの請求となるにも關らず、一旦間接經験として自己観念を除去する瞬間に於て、かかる道徳的fは消滅してただ荘厳となり猛烈となるを見る[11]。

漱石は『文学論』で独特の理論「F［認識的要素］＋f［情緒的要素］」を構築し、文学には道徳的情緒fがふくまれるが、ときとして道徳的fを消滅して荘厳を感じることがあり、それには李白の詩のような芸術のための芸術すなわち没道徳・非人情の純文学があるという。ブロンテの姦通小説『ジェン・エアー』の読者はそのような文学を非難するが、主人公が不倫を貫徹するために正妻の狂女が火を放ち焼死するに至って「手を拍って喜ぶ」ジェーンと読者は、不道徳の頂点で純文学を非難する権利があるかと問う[12]。

漱石はこの二つと破壊的崇高を挙げて美的崇高と道徳的情緒の乖離の矛盾を衝く。自然の猛威には、なにか崇高なものがあるが、その破壊力もすさまじく、義捐金を出さざるを得ない事態も惹起する。その側面を無視して、純粋美や崇高感のみを強調するのは、不道徳文学と似たり寄ったりである。それらを考慮すると、華族の手紙は義捐金を出すような道徳的fを起こさせない。それどころかむしろ不道徳文学に似ていると疑問を呈する。つまり「連戦連勝の勢いに乗じて平和克復を告げ」ると言うのは、「姦通に同情を強ひ、殺人に驚賞を値せしむる」不道徳なのである。そのことを「国家主義帝国主義に狂奔せる吾国に対して、巣鴨の気違いは異議申し立てをしている。一方、裁縫最高等大学院をつくるために本を売る者などとるに足らぬ小才でしか

ない。漱石は、『文学論』第四編第四章「滑稽的聯想」の第二節「ウィット」でそのことを衝いていた。

一般社会が小智に富み小才を弄し、……人事自然に對する熱烈の同情を失ひ、世間を冷評し、何事をも諧謔化せんと欲する時、人事材料にあれ感覚材料にあれ深く探り厚く求めて文学の眞髄を発揮する途なく、また偉大崇高なる知的分子を認識する事なし。……かゝる時代に最も稱せらるゝは頓才即ちウィットにして、人は只気が利きたりと云はるゝを無上の名誉と心得、間抜、野暮等の文字を厭う事悪疫よりも甚しきに至る。……かゝる文学は常に都會の産物にして、隣人と一銭の利を爭ひ、人の揚足をとるを以て人生の目的と心得る徒輩の間に發生するものなるを忘るべからず。江戸時代の町文學の如き其適例なり[13]。（傍線英語）

ここで漱石は、金銭をとって感謝の念まで起こさせるソフィストを批判した『弁明』一九―二〇のソクラテスのようである。漱石はウィット文学に負けず劣らずウィットの限りを尽くすが、間抜け、ぼんくら、馬鹿野郎、瘋癲を連発し、ウィット文学の信条をソクラテス的に自爆させ、非人情や壷中や掌大の天地に遊ぶ高尚人や、不道徳文学に忘我する華族や淑女を逆なでする。漱石にとって真の文学はソクラテスと猫が弁明したように、自己をみつめ、同時に道徳的情緒fを醸す場である。しかもソクラテス同様、それは暗示でしか語りえない。漱石は『文学論』第五編でその「暗示」を長々と説明する。歴史は推移であり、推移は集合意識の暗示で生まれる。推移は徐々に起こるが、ときとして暗示を急激につくりあげる馬鹿竹つまり天才が現れる。第五編第五章「原則の応用（三）」で漱石はこう述べる。

かの権威者、暴慢者、狂悖者、没識者は……愚盲見るに堪へざるの小策を弄して、天下の耳目を瞬刻の短かきに欺いて……之を自然の傾向と誤認するものあり。徒らに財帑を糜し、精力を耗し小人を役し、匹夫を駆って、集合意識を吾が欲するまゝに動かさんと欲す。天下はかくの如く安價なるものにあらざるなり。自然の法則は自然に従って始めて之を御するを得べし。人間の法則は自然よりも頑強なり。單に人間なるが故に推移の大則に反して御し得へしとするは桀紂の再生にしてかねて馬鹿竹の再生なり[14]。

漱石は文学と現実を混同しているかに見えるが、ソクラテス的な猫や苦沙弥同様、漱石にも、文学は暗示である。それゆえ『猫』でもプラトン的な迷亭のトチメンボーやらナメクジのソップの話の比喩としての料理がとびだす。それは『パイドン』のソクラテスが死の直前に書いたイソップの詩の暗示である。『文学論』では推移の大則に反する者は暴君たる桀紂のような馬鹿竹で暗示される。「馬鹿竹」の由来は不明であるが[15]、のちに検討するように『猫』を解く鍵である。ベルクソン的な意識の連続説をとる漱石は突然の推移に否定的である。

意識の推移は漸次にして、毫も此原則に抵觸せざるも、意識を外界に実現するに方つて、反動作用と目せらるゝものあり[16]。

と認識内容たるFの記号で述べる。記号を変えて説明すると、内面においてF1、F2、F3と行くべきところを、注意をひくためにF1の次ぎにF3をおくと、それは対照的であるために、あたかも愛している者が少しずつ愛を失っていき叱責にむかい頭を殴り、最後に生命を奪おうとするところを、「金蘭の愛を一朝に變じて千古の恨となすの觀あり」と言う。その極端な例はフランス革命である。

佛国革命は社會の基礎を根本より轉覆して、平和の民を殺戮の血に盤旋せしめたるもの、之を革命以前の光景に比すれば、晝の

夜に於ける、天の地に於けるよりも甚し。有史以來斯の如きの反動は人の未だ知らざる所なるべし。然れども是實現的の反動に過ぎず、もし夫れ一般民衆の腦裏に授受せられたる暗示の波動に棹さして、苦悶不平の流を内面的に溯るときはその淵源の遠き蓋し意外に出づるものあらん[17]。

第六章では反動を求める者に天才が挙げられる。人は天才が少数だとか死後に有名になると思うが、実際は名もなく漂泊のうちに死んだ天才は数しれない、と漱石は言う。漱石にとって天才は不幸者である。漱石は天道公平のような天才賛美者では断じてない。

名によって動くにあらず、不名誉の為にも動く。天才は尤も執着心に富めるものなるが故に、彼らの戦争は必ず猛烈なり。而して衆寡敵せざるは一般の原則なるが故に、天才の多くは猛烈なる戦争を命のあらん程持続して遂に窮途に斃るゝ事多しとす[18]。

芸術用語の天才が政治的にも応用されるなら、それは政治的反動者と理解されると漱石は考えている。

三、ニーチェと漱石

漱石が天道公平の手紙にかこつけて語るのは身近な戦争であった。「不平家は発作的に天降る」と言うときの不平家は革命家、さらに戦争を起こす反動家である。ニーチェは『ツァラトゥストラ』で、反動家や国家の比喩たる「火の犬」についてこう述べていた。

わたしは転覆と爆発の悪魔どもの語るのを聞くたびに、それがおまえとそっくりである……ほえたり、灰を噴き上げて、あたりを暗くすることが巧みだ。おまえたちは最上級のほら吹きで、泥を煮て熱くする術を十分に学びおぼえ……おまえの喧噪と煙とがひくと、……一つの都市がミイラとなり、ひとつの柱像が倒れて泥まみれになっていて……おまえとひとしく、国家は偽善の犬だ。国家は煙と咆哮とで語りたがる……かれの息は黄金を吐く。黄金の雨をしたたらせる[19]。

ここで国家は金儲けを追求する偽善の犬、天道の言葉では戦争をする国家である。戦争を起こすのは「権貴栄達の士」である。天道が苦沙弥に朝鮮人参を「何がゆえに服さざる」と語るとき、彼は苦沙弥が朝鮮侵略に賛同しないと暗示する。公平はニーチェ的に語るが、漱石の洋行中の明治三四年、高山樗牛もまた「文明批評家としての文学者」でニーチェの個人主義や超人論を説明していた。

ニーチェは、殆どあらゆる方面に於て十九世紀の文明に反抗せり。哲学界に於てはヘーゲル以来、科学界に於てはダーヴィン以来、一代の思想を殆ど残りなく風靡し来りたる歴史発達説も、彼の眼中には偽学者の俗論に過ぎぬものとなれり。……主観を没し人格を虐げ、先天の本能を無視するものは歴史也。個人自由の発達を防げ、凡ての人類を平凡化し、あらゆる天才を呪詛するものは歴史也。……是の如く人格の独立の為に、歴史発達論を否定したニーチェは、更に論歩を進めて民主主義と社会主義とを一撃の下に破砕し、揚言して曰く、人道の目的は衆庶平等の利福に存せずして、却って少数なる模範的人物の産出に在り。是の如き模範的人物は即ち天才也、超人也[20]。

この文章はかなり過激である。ニーチェに感化された樗牛は、社会主義だけでなく民主主義も非難する。登張竹風もまた同じ頃『帝国文学』に四回にわけて「フリードリッヒ・ニーチェを論ず」を書いた。そ

の内容こそ漱石が苦沙弥に読ませた天道公平の手紙だったのである。

世は挙って国家主義帝国主義に狂奔せるは、吾国の現状なり。而してニイチェは極端なる個人主義の鼓吹家にあらずや。あらゆる学問、あらゆる芸術は、歴史的研究を待たざるべからず、と信ずるものは、吾国学芸界の状態なり。而してニイチェは極端なる歴史排斥家にあらずや。……倫理の学は盛に行はれて、道徳は日々に壊敗し、教育の学は到る処に講ぜられて、教育の実は挙らず天才を呼ぶの声は徒らに高くして、平凡なる教育、没趣味的なる社会は却て天才の流れを防遏して已むことなし。吾国の教育界は実に斯の如きのみ。而して一切の善悪説を排して、貴族的威権説を立し、人性の目的は、畢竟天才の要請にあるのみと、説くものは、即ちニイチェに非ずや[21]。（傍線筆者）

個人主義者ニーチェを帝国主義への批判者と見なした竹風に対して、坪内逍遥が反論し、そこからニーチェ論争が起こり、漱石が『猫』を書く頃には、竹風への風当たりは強く、小説が終了した年の九月に竹風は高等師範学校校長の加納治五郎に辞表を出さざるをえなくなっていたのである。

四、韓国統監伊藤博文

『猫』は五章から日露戦争に触れ、徐々に帝国主義を滑稽化する。

日本はロシアと大戦争をしているそうだ。吾輩は日本の猫だから無論日本びいきである。できうべくんば混成猫旅団を組織してロシア兵を引っかいてやりたいと思うくらいである。

七章で苦沙弥は隣の私立中学の学生との戦争に突入する。それは集団で危害を加える帝国主義の暗示であろう。中学生が四つ目垣を乗り越えて、苦沙弥宅に侵入するし、ダムダム弾を投げ込む。侵略された苦沙弥は野蛮な張飛のように逆上する。苦沙弥は、侵略は家宅侵入罪と同じだと言わんばかりに、プラトンの狂気説を根拠にしてアキレウスのように逆上する。そのとき苦沙弥はインスピレーションある詩人であり、道徳ある国際人である。侵略に怒りを感じた苦沙弥は十章（一九〇六年初執筆）で、朝に起きると戸棚の反故紙が気になる。見ると、そこには伊藤博文の名前がある。

上を見ると明治十一年九月二十八日とある。韓国統監もこの時代からお布令れのしっぽを追っかけてあるいていたと見える。大将この時分は何をしていたんだろうと、読めそうもないところを無理によむと大蔵卿である。なるほどえらいものだ。

『猫』の世界はロレンス・スターンの小説『トリストラム・シャンディ』のごとく、海鼠のごとく尾頭や価値判断が転倒している。現実にはロシアとの宥和政策を推進し、恐露病者として非難された伊藤博文も、一九〇四年の日露戦争勃発後は枢密院議長として戦争を指導した歴史的偉人である。一九〇五年八月の日英同盟や九月にポーツマスに始まり一一月にワシントンで締結された条約によって日本は韓国への権益を確保した。日露講和条約第二条は「露西亜帝国政府ハ日本國カ韓國ニ於テ政治上、軍事上及經濟上ノ卓越ナル利益ヲ有スルコトヲ承認シ日本帝國政府カ韓國ニ於テ必要ト認ムル指導、保護及監理ノ措置ヲ執ルニ方リ之ヲ阻礙シ又ハ之ニ干渉セザルコトヲ約ス[22]」と謳う。このとき日本は軍事的目的以外に満州に鉄道敷設権をも得た。一九〇五年一一月一七日に日韓協約で両国政府は「韓国ノ富強ノ實ヲ認ムル時至ル迄此目的ヲ以テ左ノ條款ヲ約定」し第三条で「日本國政府

ハ其代表者トシテ韓國皇帝閣下ノ閾下ニ一名ノ統監（レジデントゼネラル）ヲ置ク統監ハ専ラ外交ニ關スル事項ヲ管理スル為メ京城ニ駐在シ親シ韓國皇帝閣下ニ内謁スルノ権利ヲ有ス[23]」と締結した。

一二月には伊藤博文が枢密院議長を山県有朋に譲り韓国統監に就任する（韓国は博文暗殺の翌年の一九一〇年に日本に併合される）。その月から翌年の一月三一日には、「日清満洲に關する條約」によって満州における鉄道敷設の権利を確実にする。苦沙弥が、韓国統監になりたての伊藤博文の名を「逆さ立ち」させて「えらいものだ」と言うとき、苦沙弥の目は、領土拡大の犠牲たる兵士だけでなく、被侵略者にも向けられている。猫は、苦沙弥の飯のだらしない食い方や子供への放任主義をなじるが、それよりもっとひどいものがあると言う。

今の世の働きのある人を拝見すると、うそをついて人を釣る事と、先へ回って馬の目玉を抜く事と、虚勢を張って人をおどろかす事と、鎌をかけて人を陥れる事よりほかに何も知らないようだ。中学などの少年輩までが見よう見まねに、……赤面してしかるべきのを得々と履行して未来の紳士だと思っている。これは……ごろつきと言うのである。吾輩も日本の猫だから多少の愛国心はある。こんな働き手を見るたびになぐってやりたくなる。こんなものが一人でもふえれば国家はそれだけ衰え……こんな人民のいる国家は国家の恥辱である。……こんなごろつき手に比べると主人など……無能な……猪口才でないところが上等なのである。

韓国を侵略する伊藤博文は人を釣る、先へ回って馬の目玉を抜く、虚勢を張って人をおどろかす、鎌をかけて人を陥れるような世間の代表者であり、その行為は「ごろつき」と示唆される。

この十章には、哲学者の八木独仙の不可解な講演がでてくる。皆が道端の地蔵をどかせるべく牡丹餅をみせびらかしたり、お酒で釣ろうとしたり、偽札をもって行ったり、ほら吹きが巡査の真似をしたり、大金持ちの姿でおどしたり、殿下の真似をしたりしり、大騒ぎしたりしたが、一向に地蔵は動かない。あまりの騒がしさに、何をしているのだと、世間で相手にされない「馬鹿竹」が事情を聞き、地蔵にどいてもらいたいと皆が願っている、と言うと、地蔵はそんなことか、初めからそう言えばいい、と述べて移動したという。こう素直でなければならぬ、と逆説的な独仙は女子学生に諭す。『文学論』で漱石は馬鹿竹を「桀紂」と暗示するので、馬鹿竹は伊藤博文の暗示として読める。なかなか動かない地蔵は、明治三二年から遼東半島に居座るロシアであり、地蔵を動かそうとする者たちは、列強諸国であり日本なのかもしれない。したがって独仙が女子学生に向かって、皆は馬鹿竹のようになれと言ったのは、伊藤博文のような帝国主義者になれという暗示として読める。これは『倫敦塔』で「白というて黒を意味し、小と唱えて大を思わしむ」反語である。天道公平が述べた不平家は伊藤博文であり、かれはいわば天才として、「漸次の推移」に逆らう反動家として暗示されていたように思われる。

韓国や満州での日本の権益の拡大は英国や仏国の代理戦争でもあった。列強は弱体化した国々を食い物にし、日本資本主義と帝国主義を育てあげた[24]。その指導者のひとりがビスマルクを気取る伊藤博文である。帰朝後の漱石が感じたのは、その強大化する帝国下での国民の悲惨と召集され殺される日本兵への同情にもあっただろう。『草枕』が同時に書かれた理由もそこにある。「どれほどの血が流されたか、誰も考えようとしない」というダンテの言葉は画工の言葉にもなる。それは道徳的情緒fのあらわれである。東北大飢饉という国内事情も

見据えても戦争の実態は英雄崇拝の政治家たちと財閥の利害にもとづ戦争である。『猫』創作の最初の動機は別にあったかもしれないが、戦況が判明すると漱石は日露戦争批判を露骨にする。一九〇五年七月に発表された五章から、猫は日露戦争を語りだし、バルチック艦隊が対馬・津軽・宗谷のいずれの海峡を通るかで、東郷元帥は「大いに心配された」と語り、五月二七日に終結した日本海海戦を非難してはいないが、旅順の戦では、「鼠は旅順椀の中で盛んに舞踏会を催している」と、旅順湾を旅順椀にする。まさに『文学論』第三三章第一節の「口合」せの応用である。そして猫は「目ざす敵と思ったやつが、存外けちなやろうだと、戦争が名誉だという感じが消えてにくいという念だけ残る。にくいという念を通り過ごすと張り合いが抜けてぼーとする」と言う。ぼーとしている猫は突然鼠の集団の急襲にあう。鼠はしっぽ、耳鼻ずらへかみつき「吾輩は危うい」。「死に物狂いの吾輩の魂をさえ寒からしめた」。これは旅順湾封鎖中の日本艦隊の苦戦を暗示する。この六章での猫と鼠の戦いののち七章では、猫と蟬の戦争が語られる。バルチック艦隊が全滅しても離れぬ松脂とは道義心のことであろう。ここで猫はマクベスになっている。八章で中学生の乱入事件や苦沙弥の髯の話になっていたのである。

五、髯の預言者と巨人

ところでニーチェは『ツァラトゥストラ』第二部の「大いなる事件」で、火山の穴から冥界へ下ったツァラトゥストラが見る火の犬について語る。火山は西洋では地獄の入口である。

柱像を泥に投げこむのは、およそ最大の愚行である……国家は偽善の犬だ。……国家は煙と咆哮とで語りたがる……自分は事物の核心を語っているのだと信じさせたがっている。……息は黄金を吐く。黄金の雨をしたたらせる[25]。

こう語ったのちの章の「ある予言者」において、こう述べられる。

「大きい悲哀が人類を襲うのを見た。最善のものもおのれの仕事に疲れた。『一切は空しい。一切は同じことだ。一切はすでにあったことだ』と。なるほどわれわれは収穫した。しかし、なぜすべての穀物はみな腐って、黒ずんでしまったのか。……すべての仕事はむだ骨折りだった。……泉は皆枯れてしまった。海も退いた。地はどこもが裂けようとしている」……ツァラトゥストラは、一人の予言者がそう語るのを聞いた[26]。（傍点筆者）

この文章は『エレミア書』五一章と五二章に関連するだろう。

全地を滅ぼし尽くす滅ぼしの山よ、見よ、わたしはおまえの敵になる……おまえを焼け山にする。……わたしはあなたの訴えをただし、あなたのためにあだを返す。わたしはバビロンの海をかわかし、その泉をかわかす。バビロンは廃墟となり、山犬のすまいとなり、驚きとなり、笑いとなり、偶像について語り、バビロンの滅亡を預言する預言者エレミアのよ

図6、ミケランジェロ《預言者エレミア》

うにツァラトゥストラに語らせたとき、ミケランジェロを深く理解していたニーチェは、この芸術家がシスティーナ礼拝堂に描いた《預言者エレミア》（図6）を考えていただろう。髯を生やしたエレミアは手をあてて悲嘆憔悴している。これはラファエッロが描いた《アテネの学堂》の画面下中央の「考える人」（図7）の手本であり、ミケランジェロに似せて描かれたと言わるが[27]、それはニーチェとの憂鬱質は天才の特徴になり、ミケランジェロの《預言者エレミア》やラファエッロの「考える人」はその典型だったのである。

図7、ラファエッロ「考える人」

漱石が記念写真で見せたポーズの原型であった。この姿は伝統的には四体液との関連から土星の影響を受けた憂鬱質のタイプである[28]。ルネサンスとくにミケランジェロ以来、芸術家のメランコリーとして

漱石もまた憂鬱質の文学伝統を学んだ。ミケランジェロは、一五四七年頃の詩で巨人の糞が入り口の前にあるとか、耳に蜘蛛が巣を張るというグロテスクな詩二六七番を書き、そこで「吾が幸せは憂鬱にあり、吾が安らぎは不快にあり」と書いた[29]。その憂鬱は苦沙弥の人格にあるだけでなく、『草枕』で「喜びの深きとき憂いいよいよ深く、楽しみの大いなる程苦しみも大きい」と言う画工にもシェリーの雲雀の詩「腹からの笑いといえど、苦しみの、そこにあるべし」を思いださせる[30]。シェリーは『詩の擁護』で、「昼の善いものがうなだれまろみかけると夜の黒い使いたちが餌を求めて飛び立つ」と書き、ミケランジェロの彫刻《夜》を思いだしていた。漱石もまた『猫』八章で、四体液の怒液や鈍液や憂液について語り、プラトンの『パイドロス』の狂気説を紹介して苦沙弥の逆上に変えていた。ミケランジェロはコルッチョ・サルターティ（一三三一―一四〇六）[31]の思想に学び、怒りを独裁者打倒に必須のものと見て、『ダヴィデ』を彫り、ピコ・デッラ・ミランドラが強調した『パイドロス』の詩人の狂気を[32]、システィーナ礼拝堂天井画の巫女たちの表情に付与した。怒りと狂気は、《ダヴィデ》や《デルフォイの巫女》で表明されたミケランジェロの正義感であり、髯面の彫刻《モーセ》でも見せた激しさである。ニーチェは、『ツァラトゥストラ』の第一部九章で「犯罪者・破壊者」モーセを伴侶にしたがそれはミケランジェロの彫刻《モーセ》でもあった。『猫』七章で「うめろうめろう、熱い熱い」と銭湯から飛び出すのは「超人だ。ニーチェのいわゆる超人だ。魔中の大王だ。化け物の棟梁だ」であるが、それはミケランジェロの《最後の審判》のミノスと、アダムの子孫の罪人たち（図8）のようである。その場面はダンテの『神曲』から採用された、とジョルジョ・ヴァザーリは

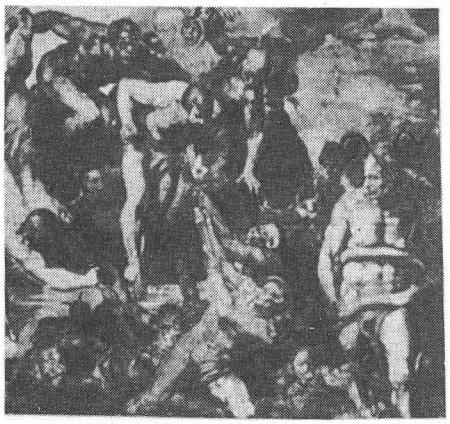

図8、《最後の審判》の悪魔大王
右端の男がミノス

一五六八年の『ミケランジェロ伝』で述べたが[33]、彼はその悪魔大王が、ミケランジェロの裸体表現は風呂屋にふさわしい、と非難した儀典長ビアジオの顔で描かれたと書き、その話をシモンズが『イタリア・ルネサンスの美術』でグロテスクにくりかえした[33]。漱石はこの本を所有していたので、風呂屋の裸体群像をミケランジェロ的な熱湯地獄に返したのであろう[34]。ニーチェが読んだブルクハルトの『チチェローネ』もまた、ミケランジェロは超人間的・奇異・グロテスクなものを求めると書いた[35]。彼の《囚われ人》（図10）のひとつは天空を支える巨人アトラスであり、ニーチェは『ツァラトゥストラ』の「至福の島々にて」の牢獄を鉄槌で破る超人にした。

図9、ミケランジェロ《囚われ人》

「私は醜い」

と詩で言うミケランジェロもまた、グロテスクな幻想の詩で、鯨を蝿のように見おろす巨人を創造する。女の巨人は人が病気になると大きくなり、人が幸福になると小さくなる[36]。命を賭した戦争を体験したミケランジェロは、独裁者を批判すべくグロテスクな巨人を詩で創作したが、巨人の祖先はダンテの『神曲』の地獄の凍った巨人までたどれる。巨人族はニーチェの超人を介して『猫』まで登場していたし、ミケランジェロの鼻の潰れた肖像版画はロダン最初の彫刻《鼻の潰れた男》の手本になったが[37]、漱石もまたデビュー作『猫』の苦沙弥を醜い顔にした。ロダンが《地獄の門》に「考える人」をおいて地獄を見たように、漱石もまた憂鬱質の苦沙弥を創作して日露戦争の地獄を見ている。それらの霊感源がミケランジェロの預言者や巫女にあったことは『草枕』から伺える[38]。漱石ががダンテ、ミケランジェロ、ニーチェから相続した批判精神は一九一〇年発刊の『白樺』の同人の道義心に火をつけたのである[39]。

おわりに

髭のヒットラーは超人思想をユダヤ人狩りに利用したが、ニーチェは『善悪の彼岸』の「民族と祖国」でドイツ人がユダヤ人を排斥するのは危険であると警告していた[40]。漱石もまた『猫』や『草枕』で、韓国や中国へ日本が侵略するのは危険だと警告している。明治四四年六月に長野県会議事院で漱石は、「自然主義はそんな非倫理的なものでは無い。如何に文學と雖も決して倫理範囲を脱して居るものではなく、少なくとも、倫理的を何所にか萌さしめなければならぬ」と語ったとき、国民のひとりひとりにも「倫理的渇仰の念」を求めていた[41]。漱石は『猫』で侵略者を「ごろつき」とよんだが、その叫びにはダンテの『神曲』天国篇第二七歌でベアトリーチェがみつめる聖ペトロの言葉「血で穢し、塵芥汚臭の掃めとした」がこめられていただろう。

註

（1）『倫敦塔』『趣味の遺伝』『坊ちゃん』『漾虚集』など。

（2）スターンの『トリストラム・シャンディ』第四巻第三二章を参照（朱牟

田夏雄訳、岩波文庫、昭和四四年）参照。

（3）Paul Barolsky, *Michelangelo's Nose*, Pensilvania, 1990, pp. 154-156.

（4）漱石の『倫敦塔』（一九〇五年）や『自転車日記』（一九〇三年）を参照。

（5）『生成の無垢』ちくま学芸文庫（一九九四年）、上、五三七（三四八－九頁）。

（6）リルケ『ロダン』高安國世訳、岩波文庫、昭和一六年。第一部は一九〇三年。

（7）『マックス・クリンガー展』カタログ、国立西洋美術館、一九八八年、九九頁。

（8）妹は後世のグロテスクなニーチェ伝説をつくる役割を果した。

（9）『ムンク展』カタログ、世田谷美術館、一九九七年、一一八－一二三頁。

（10）『世界の名著四六・ニーチェ』西尾幹二訳、中央公論社、昭和四一年。

（11）夏目漱石『漱石全集第十八巻・文學論』岩波書店、昭和三二年、一四三頁。

（12）前掲書、一四二頁。（13）前掲書、二三七－八頁。

（14）前掲書、三七三頁。

（15）スターンの『トリストラム』の道楽馬（ホビー・ホース）の「冷静な理性や公正な分別はもうおさらばです」（第二巻第五章）が馬鹿竹の典拠かもしれない。

（16）前出書、三七五頁。（17）前掲書、三七五頁。（18）前掲書、三八八頁。『文学論』、（19）「ツァラトゥストラ」、前掲書、二一〇頁。

（20）『現代日本文学大系九六、文藝評論集』筑摩書房、昭和四八年、一七頁。

（21）山崎庸佑『ニーチェ』講談者学術文庫、一九九六年、一一六－一一七頁。

（22）外務省編纂『日本外交年表竝主要文書上』、原書房、昭和四〇年、二四五頁。

（23）前掲書、二五二頁。

（24）鈴木良「日清・日露戦争」『岩波講座・世界歴史二二』、岩波書店、一九六九年、四二三－三頁。松沢弘陽「伊藤博文」『権力の思想』筑摩書房、一九六五年。

（25）『世界の名著四六・ニーチェ』、前出書、二一二頁。

（26）前掲書、二一五－二一六頁。

（27）De Campos, Il "Pensieroso" della Segnatura, in *Michelangelo Buonarroti nel Centenario del "Giudizio Universale"*, Firenze, 1942, p. 217.

（28）パノフスキー・ザクスル『土星とメランコリー』（田中英道監訳、晶文社、一九九一年）参照。

（29）J. M. Saslow, *Poetry of Michelangelo*, London, 1991, pp. 451-455.

（30）上田和夫訳『シェリー』新潮文庫、昭和五九年。

（31）C. Salutati, *De Laboribus Herculis*, I, ed. B. L. Ullman, Padova, 1951, p. 224.

（32）ピコ『人間の尊厳について』大出・阿部・伊藤博明訳、国土社、一九八五年参照。ペイターはピコの思想を「気違い病院」の一室とよんだ［別宮貞徳訳『ルネサンス』富山書房百科文庫、一九七七年。漱石蔵書はマクミラン社の一九〇一年版。

（33）Z・A・サイモンズ（シモンズ）『伊太利ルネサンスの美術』城崎祥蔵訳、昭和三年、春秋社、四一七頁。漱石蔵書は七巻のスミス・エルダー社の一九〇一年版。

（34）ヴァザーリ、田中英道・森雅彦訳『ルネサンス画人伝』白水社、（一九

八二年）。

(35) Jacob Burckhardt, Der Cicerone Eine Anleitung zum Genuss der Kunstwerke Italiens, II, in *Jacob Burckhardt Gesammelte Werke Band X*, Basel/Stuttgart, 1970, pp. 70

(36) J. M. Saslow, *op. cit.*, 171-175. Girardi n. 68.

(37) Michelangelo nell'Ottocento, *Rodin e Michelangelo*, ed. M. M. Lambetti e C. Riopelle, Milano e Firenze, 1996, pp. 134-135.
ガントナー『ロダンとミケランジェロ』海津忠雄訳、一九六六年、昭森社。

(38) 拙稿「漱石の『草枕』におけるミケランジェロ」『大阪府立大学人文学論集』一六集、一九九八年三月、一七―三八頁。

(39) 『白樺・ロダン號』第一巻第八號、明治四三年一一月一四日。

(40) ニーチェ『善悪の彼岸』の二五一、木場深定訳、岩波文庫、二四七―二五〇頁。

(41) 「教育と文芸」『漱石全集』第三三巻、岩波書店、昭和三二年、九三頁。

[追記] 本稿は、平成九年度科学研究費基盤研究（C）（2）「近代日本におけるミケランジェロの美術観の受容史」（研究代表者：中江彬）の研究成果の一部である。